The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	祝辭
Author(s)	松山, 直藏
Citation	懐徳. 1924, 1, p. 4-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88683
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

祝辭

堂友會會長懷德堂教授　松山直藏

今日は堂友會の成立を見ましたのでありますが、豫て私は此の會の生れることを望んで居つたのであります。懷德堂は開堂以來既に七年でありまして、今日に於て此の會の生れると云ふことは遲い感じがありますが、併し私は却つて其の遲いことを喜ぶものであります。又懷德堂に出入せられる方は既に幾百人を數へるのであります。今日此の會員は約八十名と云ふことでありますが、是も甚だ少いやうに考へらるゝが、私は却つて其の少いのを喜ぶものであります。室咲の花は早く散るものである。又雜多の寄合、烏合の衆は一向役に立たないものであります。懷德堂記念會の事業は御承知の通り聖經賢傳によりて德性を涵養し、又本邦の古典によつて我が國民道德の淵源するところを究めることに資し、且つ又東西の學術に關する智識を普及することを目的として居るものでありまして、詰り人間の智德修養を目的として居るのであります。此處に出入せられて居る諸君の多くは一定の職業を有つて居られまして、晝間は各其の業務に勤勞せられて、夜間は一休みでもして其の疲れを醫すと云ふが人情であるに拘らず、その時間を利用して智德の修養に努められるのであります。其の修養に御熱心なることは尋常一樣でない、其の御熱心の一致が種子核心となりて本日此の會を生み出したものと存じます、でありますからして、此の會は室咲の花のやうに俄に出來上つたものでない。又雜多の寄集りでない。私は此の七年の星霜を經てやつと生れ又僅かに百人に足らない會員で成立つと云ふことは、その遲きを恨まない、又その少なきを恨まない反つて之を喜ぶ所以はこゝにあるのであります。又此の堂友會の目的は會員諸君が相集つて親睦の情を厚くし、又切磋を爲すと云ふことが目的となつて居りまして、志を同じうする者が相語り合ひ、又お互に切磋をすると云ふことは、是は人生に於ける一つの樂みである。併しながら本會は諸君が唯清い樂みを得らるゝだけでなしに、會員相互の切磋、親睦によりて更に進んで人を利し世を益する事業が今後徐々に發達すると云ふことは、私の固く信

じて疑はないところであります。此れ等のことを考へまして、本日この堂友會の成立しましたことは、私におきましては、衷情誠に欣喜に堪へないのであります。茲に發會の式を擧げらるゝに當りまして聊か感ずるところを述べまして兼ねて本會の前途を祝福致します。

堂友會の成立を賀して

西村時彦博士

諸君には久々でお目にかかる次第でありまして、私が東京に參つてから、度々こちらにも參りましたが、落ち着いてお話を申上げると云ふ機會がなかつたのであります。祭典などの樣な儀式の折にお目にかかるに過ぎないのであります。然るに今日は斯うして多少の時間を私に與へられて諸君のお目にかかり私の感じました所をお話しするといふことは、別來殆ど初めてかと思ふ位で、寔に衷心欣喜に堪へない次第であります。

今年の祭典は十月初日に行はれる筈なのをば東京の地震の爲にお延ばしになつて、さうして、此の際のことであるから今年だけは極く簡略に祭典を執行されるといふことであります。祭典だけには私は必ず參ると申し乍ら本年は東京の方はああ云ふ天災の爲に忙しいことでもあり、或はお斷りをするかも知れないと思ひましたが、併しどんな繰合をしても一寸でも出て見たいと思ひましたのは、この堂友會の發會式の爲である。

この發會式のあることをば吉田君から聞いて私は大變喜びました。何も我我が勸めてやらせたのでもない、自發的に斯う云ふ會をお拵へになつて、只今松山先生のお述べになつた樣に、七星霜の間に生れた一つの實が結ばれた樣な氣がして、此は善い事だ、此には私も出席して見度いと斯う考へたのであります。萬一交通機關が復舊し